

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04107

研究課題名(和文)臨床心理学における非対面式スーパーヴィジョン研究

研究課題名(英文)Online supervision research in the clinical psychology

研究代表者

織田 信男(OODA, NOBUO)

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：80250645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は3つの目的から成る。まず、3つのコミュニケーションメディア(対面、電子メール、スカイプ)別スーパーヴィジョン(48回)に及ぼす2人のスーパーヴァイザーの心理的評価の比較を行った。つぎに、異なる理論のオリエンテーション(認知行動療法・ロゴセラピー・短期療法)を持つ3人のスーパーヴァイザーは3つのコミュニケーションメディアの長所、短所、改善点を指摘した。最後に、我々は、異なる理論のオリエンテーションを持つ3人のスーパーヴァイザーによるスーパーヴィジョン内容の質的分析を報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、若手の心理臨床家がスーパーヴィジョンを受ける際の地理的・経済的課題への対策として、対面だけでなく電子メールとスカイプを使用して、それらの媒体の長所と短所を異なる理論のオリエンテーションを持つ3人のスーパーヴァイザーで検討した我が国初の研究である。特に、電子媒体を用いたスーパーヴィジョンの有効性を示した研究知見は、新型コロナの影響による新しい生活様式を实践するうえで有益なものとなるであろう。

研究成果の概要(英文)：This research consists of three purposes: First, we compared two supervisees' psychological ratings on supervision (48 times) through three forms of communication media (face-to-face, e-mail, and Skype). Second, three supervisors with differential theoretical orientations (cognitive-behavioral therapy/logotherapy/brief therapy) identified the advantages, disadvantages, and points of improvement of supervision through the same communication media. Finally, we reported a qualitative analysis of contents supervised by three supervisors with differential theoretical orientations.

研究分野：臨床心理学

キーワード：スーパーヴィジョン スーパーヴァイザー スーパーヴァイザー コミュニケーション・モード

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では、臨床心理士の有資格者が平成 27 年度に 3 万人を超えたが、一方で、卒後の研修に欠かせないスーパーヴィジョン(以下 SV と略す)体制は未整備のままという質的課題が残存していた(亀口,2013)。もちろん、日本で経験豊富な心理臨床家による SV が今まで実施されてこなかったわけではなく、有償または無償の SV、個人 SV またはグループ SV 等数多くの SV 研究が行われてきた(氏原,1997; 鑓,2004; 平木,2012)。しかし、これらの SV は、スーパーヴァイザー(以下、Svor と略す)が都市部に居住しているために都市部で通常行われることが多く、地方では SV が少ない現状であったが、地方でも SV を受けたニーズはあった。

SV の形式に関しては心理面接と同様に対面面接形式が基本であるが、地方で対面面接を実施するためには、スーパーヴァイザー(以下 Svee と略す)が Svor へ、または Svor が Svee へ会いに行く際に地理的・時間的制約が生じていた。したがって、継続的な SV を行うためには、対面式の SV を補足する地理的制限を乗り越える非対面式の SV が必要であり、その特徴を明らかにすることが重要であった。

SV に利用できる非対面形式の心理面接で使用されるメディアには、日記、手紙、電話、ファックス、電子メール、テレビ電話などがあり(森・岩壁,2005)、即時性や情報量などの点で異なる特徴をもつ。これらのメディアの中で、電子媒体を心理面接に応用したものにメールカウンセリングがあるが、渋谷(2006)によれば、E メールカウンセリングは情報伝達のコスト効率が良い、つながっている安心感がある、一定の匿名性が守られるなどのメリットがある一方で、インターネット中毒の危険、直接的コミュニケーションの希薄化、習慣性の恐れや応答側(カウンセラー)の時間的負担が大きいなどのデメリットがあると指摘する。

高橋(2011)によれば、E メールカウンセリングの利用者のなかには、悩みを文章にする困難さを訴える者がいた。この理由で、E メールよりもビデオチャット(Skype)のほうが面接の内容の深まりでより高い評価を得ていたのではないかと指摘する。

したがって、E メールカウンセリングの対象者は、筆記の苦手なクライアントよりも筆記力の高い専門家である Svee のほうが向いていると思われる。

日本で電子メールまたはビデオチャットと対面 SV を比較検討した織田(2014a)によれば、Svee 側の評価では、これら 3 つのコミュニケーションメディア(以下、CM と略す)すべてにおいて、SV 前後で Svee の肯定的感情は有意に上昇し、否定的感情と事例困難度は有意に低減した。また、地理的負担度と経済的負担度は、2 つの非対面 SV が対面 SV よりも有意に低かったが、心理的負担度に有意な差異は認められなかった。従来知見と異なって心理的負担度に差異が認められなかった理由は、クライアント(以下、CL と略す)に比べて修士号を持つ Svee のメディアリテラシーが高かったためと思われる。

一方、2 人の Svor 側の評価では、CM 毎に長所と短所が異なった(織田・佐々木,2014b)。例えば、E メール SV では、Svee 側からの質問が活字で示されるので、質問の回答を中心に対応する Svor と、Svee の発達段階を考慮した返事を出す Svor では、他の 2 つの CM と比較して E メール SV の負担度が異なった。つまり、後者の Svor では E メールによる情報の少なさが、Svee の発達段階を考慮するうえで困難さを報告した。この点は、欧米の SV 研究においても、教育・支援・管理的な機能を持つ SV(Kadushin,A.,1976)もあれば、発達・資源開発的な機能を持つ SV(Thomas, F.N.,2013)もあり、Svor のオリエンテーションによって SV の機能は異なることが示唆された。とりわけ、E メール SV では、異なるオリエンテーションを持つ Svor にとって SV の実行容易性や満足感が異なるであろう。しかし、一方でビデオチャット SV は対面 SV とほぼ同等の SV 効果を持つことが示されてきた。この理由として、織田の研究に参加した Svee は、Svor と研究前に既知でラポールをある程度築いていた者であった(2013,2014a)。したがって、若手 Svee がラポールの薄い Svor に最初からビデオチャット SV を受ける場合、対面 SV と同様のラポールを形成できるかは不明である。そこで、本研究では、SV 事前にラポールの薄い Svor も含めた Svor の集団を作り、Svee にその集団から Svor を選択してもらい、CM 別 SV の効果を検証する。Svor の集団は異なるオリエンテーションを持つ Svor が含まれていると Svee の選択の自由が考えられたので、認知行動療法、ロゴセラピー、短期療法(以下、SFA と略す)の 3 つの理論を主にオリエンテーションを持つ Svor で構成した。

2. 研究の目的

- (1) Svee による対面 SV と非対面式 SV への評価比較
- (2) Svor による対面 SV と非対面式 SV への評価比較
- (3) 異なるオリエンテーションを持つ SV 内容の質的分析

3. 研究の方法

- (1) 対象者：Svee は研究開始時に臨床心理士資格取得後 5 年未満の女性 2 名。Svor は臨床心理士の男性 3 名で、オリエンテーションは A が認知行動療法+SFA、B が来談者中心療法 + 行動療法 + ロゴセラピー + 心理生理学、C が来談者中心療法+SFA の折衷派。4 組の組み合わせの中で 2 組が初対面の組み合わせであった。
- (2) 質問項目：Svee の SV 事前評価尺度として、事例困難度(10 件法)、感情気分評定 20(福島・

高橋・松本・上田・中村,2005) (6件法)を使用した。SV 事後評価尺度として、事例困難度 (10件法)、感情気分評定 20(6件法)、SV の効果の指標として、SV の時期の適切度(5件法)など 20項目を選定。地理的負担度、経済的負担度、心理的負担度は 10 件法で、短所、長所、改善点は自由記述形式で設定した。Svor の SV 事後評価尺度は、SV 準備時間数、SV 時間数、心理的負担度 (5 件法) と自由記述による SV の短所、長所、改善点であった。

(3) 手続き: SV 実施期間は 2015 年 10 月から 2018 年 12 月までであった。SV に関する説明を行った後、2 名の Svee が SV 契約書にサインをした。その後、ノート PC(Panasonic CF-RZ4LDFJR)やデータ通信機器(日本通信 b-mobile 4G)等スカイプ SV をするための装置一式を貸与した。SV 契約後の翌月から、スカイプ、電子メール、対面 SV を順に毎月 1 回実施。Svee と Svor は SV の前後に SV の効果に関する評価に関して、インターネット上のリアルタイム評価支援システム(芝崎・近藤, 2008)を用いて回答した。

4. 研究成果

(1) Svee による対面 SV と非対面式 SV への評価比較

量的検討

まず、肯定的感情、否定的感情、事例困難度の平均と標準偏差と CM (対面・電子メール・スカイプ) × 時間 (事前・事後) の分散分析の結果を Table 1 に示す。肯定的感情において CM と時間の交互作用が認められた。単純主効果検定の結果、事前においてスカイプ ($M=2.72$) よりも対面 SV ($M=3.11$) が有意に高かった。また、対面とスカイプ SV では事前 ($M=3.11; 2.72$) よりも事後 ($M=3.53; 3.50$) に肯定的感情が有意に増加した。つぎに、時間の主効果が 3 つの従属変数において認められた。すなわち、肯定的感情は有意に増加し、否定的感情と事例困難度は有意に減少した。また、肯定的感情と否定的感情で CM の主効果が認められた。否定的感情は、対面 SV ($M=2.71$) がスカイプ SV ($M=3.10$) とメール SV ($M=3.07$) に比べて 5%水準と 10%水準で低い傾向が認められた。この結果は、織田・佐々木(2014b)の既知でラポールのある Svee と本研究の半分が初対面のペアと比べて、肯定的感情だけでなく否定的感情においてもメール SV よりも対面 SV の優位性が示された。初対面においては SV においても対面 SV のほうが感情面でより高い評価を受けやすいことを示唆する。

Table 1 CM別測定時点毎の感情と事例困難度の平均と標準偏差と分散分析結果

尺度	CM 時間	対面		電子メール		スカイプ		CM F 値	時間 F 値	CM×時間 F 値			
		M	SD	M	SD	M	SD						
肯定的感情	SV前	3.11	.35	2.85	.35	2.72	.44	3.00 *	.12	31.64 **	.41	3.23 *	.13
	SV後	3.53	.62	3.11	.48	3.50	.67						
否定的感情	SV前	2.98	.40	3.21	.51	3.38	.56	3.83 *	.15	32.64 **	.42	1.07	.05
	SV後	2.44	.58	2.92	.61	2.83	.45						
事例困難度	SV前	6.87	1.88	6.38	1.71	7.63	1.50	1.53	.07	37.36 **	.46	.95	.04
	SV後	5.73	1.67	5.69	1.85	6.44	1.93						

* $p < .05$, ** $p < .01$

つぎに、SV 効果尺度毎に CM を群とした 1 要因 3 水準の分散分析を行った結果 (Table 2) 群の主効果が有意に示された尺度は、「感情の気づき度」、「地理的負担度」、「経済的負担度」であった。多重比較の結果、「感情の気づき度」では、メール ($M=3.13$) よりも対面 SV ($M=4.06$) のほうが高い評価を得た。一方、「地理的負担度」と「経済的負担度」では、メール ($M=1.00; 1.00$) やスカイプ ($M=1.00; 1.25$) よりも対面 SV ($M=8.75; 7.50$) が有意に高かった。また、「ペース適切度」、「思考の気づき度」、「問題解決度」では有意な傾向が認められた。

2 人の Svor が 4 人の Svee に SV を行った織田・佐々木(2014b)では、「SV への積極度」のみが同様の結果であったが、本報告では 3 つの尺度で有意な効果が、また 3 つの尺度で有意な傾向が認められた。なかでも、Svee 自身の「感情の気づき度」や「思考の気づき度」においては、メール SV は対面 SV に比較して評価が低かった。これはメール SV では Svee が質問した内容への応答が中心となりやすく、一方、対面 SV では Svor は Svee が示す非言語的情報に対してフィードバックが行われやすいこと等が示唆される。

Table 2 CM別各尺度の平均と標準偏差と分散分析結果

CM 尺度	対面(a)		メール(b)		スカイプ(c)		F 値	2	多重 比較
	M	SD	M	SD	M	SD			
役立ち度	8.00	1.03	7.94	1.44	7.75	1.69	.14	.01	
満足度	8.06	1.06	7.44	1.36	7.81	1.76	.78	.03	
時期の適切度	4.19	.83	3.81	1.22	3.88	1.36	.48	.02	
時間の長さ適切度	3.94	1.06	3.60	.83	3.81	1.05	.46	.02	
ペース適切度	3.88	.96	3.31	1.01	4.13	1.06	2.70 †	.11	b<c
内容の分かりやすさ	4.00	1.03	4.31	1.20	3.94	1.18	.50	.02	
SVへの積極度	4.00	.63	3.94	.93	4.13	.96	.20	.01	
SVによる被受容感	4.00	1.10	4.06	1.18	4.25	1.06	.22	.01	
SVへの受容度	4.19	.83	4.07	1.22	3.94	1.12	.22	.01	
両者尊重度	4.38	1.02	4.13	1.02	4.25	1.06	.23	.01	
新視点度	4.06	1.12	3.94	1.24	3.56	1.26	.74	.03	
感情の気づき度	4.06	.44	3.13	1.06	3.27	1.10	4.77 *	.18	b<a
思考の気づき度	4.00	.52	3.38	.89	3.60	.91	2.58 †	.10	b<a
行動の気づき度	3.69	.79	3.31	.85	3.38	.96	.82	.04	
身体の気づき度	2.69	.70	2.75	.77	2.69	.70	.04	.00	
環境資源の気づき度	3.81	.66	3.25	.93	3.50	.73	2.08	.08	
元気度	3.75	.68	3.31	.79	3.80	.56	2.40	.10	
不安減少度	3.88	.72	3.56	.81	3.63	.81	.72	.03	
自己受容度	3.69	.70	3.43	.76	3.81	.66	1.14	.05	
問題解決度	4.00	.00	3.63	.72	3.50	.73	3.10 †	.12	c<a
地理的負担度	8.75	1.00	1.00	.00	1.00	.00	961.00 **	.98	b,c<a
経済的負担度	7.50	1.26	1.00	.00	1.25	1.00	250.38 **	.92	b,c<a
心理的負担度	7.50	2.37	6.31	1.99	6.31	2.82	1.29	.05	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

一方、効果測定尺度の「問題解決度」を除く全ての尺度で対面SVとスカイプSVの間に有意な差は認められなかった。これはスカイプを実施する通信速度の安定等のインフラの向上やSveeがある一定水準の情報リテラシーを持つ等の条件が揃えば、対面SVと効果の差が無いことを意味する。また、「地理的負担度」と「経済的負担度」では主効果が認められ、多重比較の結果、いずれも対面SVはメールSVやスカイプSVに比べて地理的・経済的負担が大きかったが、「心理的負担度」では有意な差が認められなかった。これらの結果は、地方で実施されるSVにおいてスカイプSVの利用可能性を広げるものとして位置づけられるであろう。

質的検討

SveeのSV事後評価として、自由記述で求めたSVの短所、長所、改善点をKJ法でカテゴリーに分類した。つぎにCMの種類によってSVの短所の度数の割合に違いがあるかを検討したが、有意な偏りはなかった。SVの長所は、KJ法の結果、「自己成長感の獲得（自己理解の促進等）」、「ケースの理解促進（ケース対応理解の促進等）」、「媒体の強みCM（早期対処性等）」の3つの大カテゴリーに分類された(Table 3)。

Table 3 CM別SVの良かった点カテゴリーの度数と割合

	対面SV		メールSV		スカイプSV	
	度数	%	度数	%	度数	%
自己成長感の獲得	12	60.0	4	20.0	13	65.0
ケースの理解促進	8	40.0	13	65.0	5	25.0
媒体の強み	0	0.0	3	15.0	2	10.0

CMの種類によってSVの長所の度数の割合に違いがあるかを χ^2 検定した結果、人数の偏りが有意であった($\chi^2(4)=11.60, p<.05$)。残差分析の結果、メールSVでは「自己成長感の獲得」よりも「ケースの理解促進」が有意に多く、一方、スカイプSVでは逆の結果となった。最後に、CMの種類によってSVの改善点の度数の割合に違いがあるかを検討したが、有意な偏りはなかった。Svorは、メールSVの長所を「自己成長感の獲得」よりも「ケースの理解促進」に効果があることを示唆した。この理由として、メールSVは対面やスカイプSVに比べてSvorからの即時的フィードバックが得られない等の理由から「Svor自身」に焦点を当てるSVが実施されることが挙げられる。一方、ケースに関する質問への回答を活字で求めるメールSVでは、問題が整理され、返事を何回も読み返せる等の利点から、SVが「Svorの成長感の獲得」よりも「ケースの理解促進」に焦点が当てられやすいことが示唆された。

(2) Svor による対面 SV と非対面式 SV への評価比較

SV の準備時間数、SV 時間数、心理的負担度毎に、CM を群とした 1 要因 3 水準の分散分析を行った結果、いずれの変数でも群の主効果が有意に示されなかった。準備時間数と SV 時間数の概念が多義的であったので、2 つの変数を合計した変数で検討がやはり有意な結果は得られなかった。メール SV は 2 つの SV に比べて合計時間数は数値的には高かったが、スカイプ SV の設定時間の長さ、対面 SV の延長などがあり、合計時間数で差が出なかったと思われる。

Svor の自由記述をもとに、3 つの CM 別 SV の短所、長所、改善点の一部を報告する。

まず、対面 SV の短所は、移動時間を考慮したスケジュール調整の困難さ、ケースよりも Svee の対応に重点が置かれるカウンセリング的な意味が強くなる点等。長所は、自分のコメントに対する Svee の反応がすぐにわかること、同じ場所にいるので非言語的反応が伝わってきやすいこと、会話の合間に SV と関係無い話しもできるので堅苦しい雰囲気はなくなること、スカイプ SV よりも間合いの緊張が小さいので目を閉じてイメージをしやすい等。改善点としては、SV の時間の確保のためのスケジュール調整、その場で図示するなど道具の活用等であった。

E メール SV の短所は、Svee の提供する情報の制限、Svee の要望がどこまであるのかを推測しながら対応する負担、他の CM に比べて返事を書くために要する時間数が長いこと、自分のコメントに対するフィードバックの無さから生じる不安等。長所は SV に費やす時間帯を自由に設定し易いこと、多角的に考察してから返事ができること、論点が明確になる等。改善点は、Svee のニーズを確認するために SV を 2 往復にすること、SV 時間を短縮するために Svee のメールに校閲機能を用いて返信する等であった。

スカイプ SV の短所はある程度のメディアリテラシーが必要なこと、通信障害が生じると Svor 自身の意図が伝わりにくいことを考慮して Svee の課題への取り組みを指摘しにくくなること等。長所は Svee の表情が分かりこちら側の質問にもすぐに答えてもらえること、時間と場所の制限を弱める SV 設定の容易さ等。改善点は、音声が明確に聞こえる回線と装置と環境の整備、会話の間の長さの調整等であった。

(3) 異なるオリエンテーションを持つ SV 内容の質的分析

メール SV は、対面 SV やスカイプ SV に比べて Svee からの SV に対する評価が低くなる傾向があるにもかかわらず、Table 1~3 の結果から他の SV と同様にメール SV の効果が認められた。この理由として、3 人の Svor の特徴と工夫が認められたので、一通のやり取りの中から概要の一部を以下に記す。

まず、Svor A は認知行動療法と解決志向アプローチ（以下、SFA と略す）をオリエンテーションに持つが、Svee からクライアント（以下、CL）に対する否定的感情の対処に関して Svor の体験談を求める質問に対して、「Svee が自らの態度を振り返る意義のコンプリメント」「Svor のよる CL の見立ての提供」「否定的感情が生じた際の Svor 自身の過去の対処法（自身の背景を理解する）の記述」「Svor 自身が自己理解のために用いた認知療法の ABC 分析の経験を紹介」「自分の反応パターンへの理解の重要性の指摘」「自分の反応パターンがうまくいかない時の変化の必要性の記述」等を試み、その後の工夫として「Svee のニーズに応えることを重視する立場から、メール SV へのフィードバックを求めるといったメールのやりとり回数を 2 回にした」等が行われていた。

Svor B は来談者中心療法 + 行動療法 + ロゴセラピー + 心理生理学をオリエンテーションに持つが、Svee からこだわりの強い CL に対する Svor の感想と対処法の質問に対して、「Svor のケースの見立て」「Svee の対処に対する保証」「Svor による CL に関するアセスメントの複数提示」「治療目標の複数提示」「感情と動作の優先」「複数の目標接近法の提示」「今ここでの感情の焦点化」「マインドフルネス」「ロゴセラピーからの提案（自己距離化、自己超越）」等を試み、その後の工夫として「Svor B は複数の視点をまとめて返す形式から Svor のケース報告資料に Svor のコメントを書き込む形式に変更」等が行われていた。

Svor C は来談者中心療法と SFA をオリエンテーションに持つが、Svee から不安の強い CL に対する他の対処法に関する質問に対して、「Svee から提出してもらった資料に、問題と、Svee 側の対応、CL の望ましい対処法を色分けし、問題よりも後者の 2 つの領域が多いことを示し、保証した」「もう一つの目標の示唆」「Svee の対応を支持」「相談内容と対応を表にしてフィードバックした」等を試み、その後の工夫として「SV の時間短縮のために、取り扱うケースを複数から一つに絞り対応」等が行われていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 織田信男・山口浩・伊藤拓
2. 発表標題 非対面式スーパービジョン研究(5) スーパーヴァイザーの自由記述によるS V効果検討
3. 学会等名 日本ブリーフサイコセラピー学会第29回群馬大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 織田信男・山口浩・伊藤拓
2. 発表標題 非対面式スーパービジョン研究(4) 3人のスーパーヴァイザーのメールS V比較
3. 学会等名 日本ブリーフサイコセラピー学会第28回京都大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 織田信男・佐々木誠・山口浩・伊藤拓
2. 発表標題 非対面式スーパービジョン研究(2) スーパーヴァイザーの3年間の評価より
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 織田信男・佐々木誠・山口浩・伊藤拓・山本眞利子
2. 発表標題 非対面式スーパービジョン研究(3) スーパーヴァイザーの感情の評価より
3. 学会等名 日本ブリーフサイコセラピー学会第27回松山大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 織田信男・伊藤拓・佐々木誠
2. 発表標題 非対面式スーパーヴィジョン研究(1) 3人のスーパーヴァイザーの評価より
3. 学会等名 日本ブリーフサイコセラピー学会第26回大会六本木大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 浩 (Yamaguchi Hiroshi) (20174625)	岩手大学・人文社会科学部・嘱託教授 (11201)	
研究分担者	伊藤 拓 (Itoh Taku) (20412306)	明治学院大学・心理学部・教授 (32683)	
研究分担者	山本 眞利子 (Yamamoto Mariko) (70289205)	久留米大学・文学部・准教授 (37104)	